竹島俊之先生を悼む

今田 良信

本学会会長であり、広島大学名誉教授でもあった竹島俊之先生が、2006（平成18）年8月26日22時20分にお亡くなりになったとの第一報を伺ったのは、元本学会副会長であった古浦敏生先生（広島大学名誉教授）からであったと記憶している。享年65歳。それまでにも体調が良くないことは伺っていたものの、この知らせには些か慌ててしまった。その前年2005年3月に広島大学を定年退職され、文学研究科主催の送別会で、これからは自分のやりたいライフワークの仕事である、ポリュビオスの『歴史』の翻訳に思い切り打ち込めると、本当に嬉しそうに仰っていたからである。竹島先生に一方ならぬお世話になった者として、先生の思い出を少しお話してみたい。

竹島先生には、授業については、私の所属する広島大学の文学研究科では「ヨーロッパ語比較構文論講義」や「ヨーロッパ語比較構文論演習」等の授業を、また、文学部では学部共通の「（古代）ギリシア語」の授業を受け持っていただいたり、学会活動については、西日本言語学会（古浦敏生会長）の運営委員を長年に亘ってお務めいただいていた関係で、お会いしたり、お話を伺う機会は度々あった。何をお尋ねしてもいつも変わることなく、何についてでも真面目に受け答えして下さった。ただし、竹島先生は生真面目一方というのではなく、懇親会などでお酒が入ると、先生特有の名調子や迷（？）調子が出ることもあって、これも今となっては楽しかった思い出である。

しかし、私が竹島先生の授業を受けたのは、ただ一度きりである。それは、1976（昭和51）年、私が広島大学文学部文学科言語学専攻に入学して2年目の時に受けた上述の「ギリシア語」の授業であった。もう35年も前のことである。その授業は金曜日の1・2時限目にあった。実は、私はその同じ金曜日の7・8時限目に上述の古浦敏生先生の「歴史言語学演習」という授業も取っていた。演習内容は、何とヘシオドスの『神統記（テオゴニア）』の原書講読であった。

単位取得の都合があったとはいえ、古代ギリシア語の初級文法を一から習いながら同時進行で、同じ言語の講読授業を取るという、今にして思えば随分と無茶苦茶な、と言うか、無理なことをしていたものだと思う。おかげで、木曜日の夜は徹夜となることも多かった。本当にきつかったのを覚えている。

竹島先生は、授業を休講にされることがほとんど無かった。ある雨の日など、私が教室に急いでいると、数十メートル先を、傘を差し、背筋をピンと伸ばして、颯爽と教室に向かわれる先生のお姿があった。今も鮮明に記憶に焼きついている。

竹島先生の授業で驚いたことは、音読を非常に大切にされていたことであった。教科書は田中美知太郎・松平千秋著『ギリシア語入門　改訂版』（岩波全書）であったが、その中に出てくるギリシア語の文や語形変化表はほとんど全て一緒に学生に音読させておられた。竹島先生が先ず読んで見せられ、その後を学生がついて読む。これを2回ほど繰り返すのである。各単元の練習問題は、ほとんどがギリシア語の日本語訳と日本語のギリシア語訳（作文）から成っていたが、省略することなく一つ一つ学生に割り振って遣らせておられた。そして、最後はどちらもギリシア語文の音読である。ある時、音読する例文の中にプラトーンからの引用文が出てきたことがある。その文を、竹島先生は徐に2～3回自ら味わうように音読された後、「プラトーンの声が聞こえるね。」と仰ったのである。その当時、学部2年生でギリシア語について右も左も判らない私はあっけに取られるばかりで、竹島先生の深い境地など推し量るべくもなかったが、この出来事は、あくまで真面目に、あくまで真摯に、あくまで誠実にという私が感じた竹島先生の教育姿勢と共に強く印象に残っている。

竹島先生が自らライフワークと仰っていた、ポリュビオスの『歴史』も3巻本で総ページ数1500ページに及ぼうかという大部の御翻訳本となって結実したことは、皆さんご存知の通りである。本邦初の原典完全邦訳という偉業であった。御退職からお亡くなりになるまでそれほど十分な猶予があったとは言えないにも拘わらず、見事に初志を貫徹された。御翻訳本第3巻末の龍渓書舎の北村正光氏の「追悼のことば」によれば、先生は「病床にあってもなお作業をされた為、病室はあたかも研究室の観が」あったということである。あまり表には見せられることのなかった学問への厳しさ、鬼気迫るような執念は、余人にはなかなか真似のできないことであると思う。

あの朗々とギリシア語を吟じられた竹島先生のお声は最早聞くことができないが、同じ言語学・語学教育に携わる者の一人として、先生の研究や教育への

姿勢は大切にしなければいけないと感じている。

最後に、竹島先生に心より哀悼の意を捧げたい。竹島先生、本当にありがとうございました。